

令和7年度教育未来委員会行政視察報告書

教育未来委員会
委員長 阿部 智

【視察日程】 令和7年10月8日（水）～10月10日（金）

【視察委員】 委員長 阿部 智
副委員長 岡崎 純子
委員 吉川 英二、渡邊 惟大、青山 雅紀、
伊藤 隆広、松坂 吉則、麻生 紀雄、
盛田 眞弓

【視察地及び調査事項】

- 1 大田区立大森東小学校（10月8日）
（1）おおたグローバルコミュニケーションについて
- 2 出雲市立塩冶小学校（10月9日）
（1）外国人児童生徒への日本語指導について
- 3 西尾市（10月10日）
（1）外国にルーツを持つ子供の就学支援事業について

【視察報告】

1 大田区立大森東小学校

(1) おおたグローバルコミュニケーションについて

調査目的	<p>大森東小学校では、VR技術を使用した海外体験ルームなどを活用し、児童の英語による実践的なコミュニケーション能力を育成するとともに、主体性、積極性などをはぐくみ、また、外国の学校や大使館、留学生等との交流を通して、異文化に対する理解を深め、豊かな国際感覚を醸成することを目的とした「おおたグローバルコミュニケーション」(OGC)という国際教育を実施している。</p> <p>外国人と共生社会を構築していくためのグローバル人材の育成について確認し、本市の取組の参考とする。</p>
視察概要	<p>1 調査項目</p> <p>(1) おおたグローバルコミュニケーションについて(現地視察)</p> <ul style="list-style-type: none">・事業概要、予算額・大田区における国際教育の取組内容・事業実施に至った経緯・OGCルームの活用状況・児童、保護者からの声・事業の効果、課題・今後の方向性 <div data-bbox="480 1055 1358 1599"></div> <p>2 説明者</p> <p>大田区立大森東小学校 校長 大田区教育委員会事務局教育総務部指導課 指導主事</p>

	<p>3 主な質疑（□：質疑、■：答弁）</p> <p>□OGCルームは年間いくらかかっているのか。 ■リース費用が3年間で2,400万円かかっているほか、運用費が毎年300万円かかっている。</p> <p>□区立中学校における夏休みの海外派遣について、旅費は公費から出るのか。 ■海外派遣の旅費はすべて公費で支出している。</p> <p>□学区外から大森東小学校への入学を希望する声はないのか。 ■徒歩圏内である近隣校の学区に当たる児童が入学を申請する事例はある。通学上の安全が確認でき、教育委員会や校長が了承すれば入学できる。</p> <p>□本日の授業中、担任と英語教員、そのほかにも授業に入っている方がいたが、普段の授業でも全員いるのか。 ■普段の授業でもいる。ただし、担任でも英語教員でもない教員は、自閉症の児童のサポートとして入っている。</p> <p>□OGCティーチャーの給料は、正規職員と同じか。 ■大田区の会計年度任用職員と同じ給料となっている。</p> <p>□OGCの授業はどれくらいやっているのか。 ■週2回行っている。年間だと、1・2年生は、大田区では25時間、外国語活動を行うこととなっているところ、大森東小学校では70時間、OGCの授業を行っている。3～6年生については、文科省で決められている外国語活動の時間に上乗せをして、3・4年生は年間70時間、5・6年生は年間90時間、OGCの授業を行っている。総合の時間を活用している。</p> <p>□お弁当を持ってきている子供が多いということだが、全員で給食を食べる日などはあるのか。 ■食材に豚肉が使われている場合もあることから、全員で食べる日は設けていない。</p> <p>□先生の授業の準備について伺いたい。 ■OGCのシステムを使いこなすためには練習が必要ではあるが、大森東小学校の教員は国際教育が大事だという意識が高く、自発的に使い、システムに新しい画面を作って、ほかの教員が作ったものを共有したりもしている。教員からは慣れたという声を聞いている。</p> <p>□OGCのシステムはいつ導入したか。 ■令和5年12月に導入した。</p>
委員の主な所感	<p>○確保が困難とおぼしきOGC講師が、収入確保が不安定な会計年度採用というのは、生徒らから信頼を得るころには離れるリスクを考えても残念で、確保した講師陣の定着に重きを置くだけの予算確保が望ましいと感じた。</p>

	<p>○本市で同じだけの体制がとれるかといえば、東京23区の中でも肝いりの施策に並ぶことは難しいとしても、本市なりの規模で、試行的にこのスタイルを模倣し、検証するまでなら可能性はあると考えた。</p> <p>○V R技術を活用した海外体験ルームでの授業を視察した。疑似体験ではあるが、実際に海外の街中にいる没入感の中での英会話の実践は、様々なシチュエーションがあり、飽きることなく興味を持ち、効果的な語学習得につながると感じた。</p> <p>○海外体験ルーム設定の予算については、N T T作成によるコンテンツ3,000万円、空間700万円、3年リース2,400万円、基礎300万円の計6,400万円の初期費用とのことなので、千葉市においては、6区に各1校のモデル校設定として3億8,000万円もかかる。まずは、1校のみのモデル校を設定し、高校や大学の留学生等との交流を通して、異文化に対する理解を深め、豊かな国際感覚を醸成することは、千葉市においても実施できるのではないかと思った。</p> <p>○ハード面の整備と共に、O G Cティーチャーと外国語指導員の確保による年間70時間の充実した英語学習の授業を本市で実施するには多くの課題があると感じたので、今後のおおたグローバルコミュニケーションの取組を注視し、本市の国際教育に活かしていきたい。</p> <p>○V R活用の海外体験ルームにおいて、児童が生き生きとしていた様子が印象的であった。</p> <p>○直感的に英語を学ぶには適しているシステムであると思う。ただ、費用が高額なのは大きな障壁であることから、同様の効果を安価にもたらすシステムに進化していくことが期待される。</p> <p>○千葉市でもこのようなグローバル感覚の体験も必要だと思う。</p> <p>○様々な国の文化に触れる機会があり、児童の国際理解を深める取組は評価できる。</p> <p>○英語教育については、初期投資やランニングコストを要する取組が含まれるため、導入には慎重な検討が必要であると感じた。</p> <p>○学校の食事に合わない場合は弁当を持参するという原則を明確にし、運用をしているとの校長先生の話は、非常に勉強になる事例であった。</p> <p>○語学教育としては、十分に対応できている。</p> <p>○小学3年生のクラスの子供達は、活発で自分から表現したり話しかけてくる様子もあり、英語学習を通して、コミュニケーション力や自己肯定感が高まっている一面を感じられた。</p> <p>○海外体験ルームでの、3方向に写し出される画面に囲まれて「自分がその世界の中にいる」感覚を持ちながら、多様な国の様子や生活を学べる環境は貴重だと思った。</p> <p>○A L Tの先生のネイティブな発音で、子どもたちが言葉を交わしながら買い物をする授業を見て、耳で英語の発音を聴き、話すことで相手に伝えるというコミュニケーション力が育まれていることが一番印象に残った。</p>
--	---

視察時の様子



2 出雲市立塩冶小学校

(1) 外国人児童生徒への日本語指導について

調査目的	<p>出雲市では、日本での学習経験がない児童生徒を対象とした「日本語初期集中指導教室」での初期集中指導や、市内で日本語指導が必要な児童生徒の在籍数が多い6校を「日本語指導拠点校」と位置づけ、専門の「出雲市日本語指導員」を配置するなどの取組を行っている。</p> <p>日本語指導拠点校の一つである塩冶小学校を訪問し、日本語指導の授業風景を視察するとともに、出雲市における外国人児童生徒への日本語指導の取組や課題についても確認し、本市の取組の参考とする。</p>
視察概要	<p>1 調査項目</p> <p>(1) 外国人児童生徒への日本語指導について（現地視察）</p> <ul style="list-style-type: none">・ 事業概要、予算・ 事業実施に至った経緯・ 出雲市日本語指導員の確保策・ 日本語初期集中指導教室の取組内容・ 日本語指導が必要な児童生徒のキャリア教育・ 事業の効果、課題・ 今後の方向性  <p>2 説明者</p> <p>出雲市教育委員会 副教育長 出雲市教育委員会教育部学校教育課 主幹 出雲市立塩冶小学校 校長</p>

3 主な質疑（□：質疑、■：答弁）

- 塩冶小学校では、児童は全員徒歩で通学しているのか。
■スクールバス等はなく、全員徒歩で通学している。一番遠い児童だと4キロほど遠くから徒歩で通学している。
- 日本語教育の教材は文部科学省から出ているのか。それとも独自で作成しているのか。
■文部科学省から出ているものもあるが、豊橋市や三重県、東京都のものを参考にして作成した教材を使用している。
- 多文化共生を意識した教育活動にはどのようなものがあるのか。また、外国にルーツを持つ子供の保護者とのコミュニケーションで意識している点を伺いたい。
■県の文化国際課の方にロールモデル講演会を行ってもらったり、外国にルーツを持つ子供の保護者から児童に対して、日本に来た背景などを話してもらったりなど、各校が実態に合わせて多文化共生に関する取組を行っている。
また、外国にルーツを持つ子供の保護者が子供を通わせやすい体制づくりのために、文書や電話対応の際には、通訳・翻訳支援員が関わりながら対応している。
- 中国語の母語支援ニーズが増えているとのことだが、最近急激に増えたのか。
■急激にというよりは、少しずつ増えてきている印象である。1～3歳児の状況を見ると、今後ベトナム語の支援ニーズが増えそうなので、柔軟な対応が必要と考えている。
- 日本語指導拠点校を小学校・中学校それぞれ3校ずつにした理由を伺いたい。
■外国にルーツを持つ方が多く居住しているエリアを選定した。
- 関係機関や企業と連携した取組について詳しく伺いたい。
■日本語初期指導教室の立ち上げの際に、派遣会社等の民間企業に、設備の提供や学校への送迎などの支援をしていただいた。そのような打合せや協議を、今は定着してきたこともあり学期ごとに1回くらいだが、当時はもっと頻繁に行っていた。
- 外国にルーツを持つ児童・生徒は、体操服やランドセルなど、通学に必要なものはどうしているのか。
■日本人の小中学生が購入するものについては、同じように購入していただいている。日本人・外国人問わず、所得に応じた支援制度はあるが、あまり申請される方は多くない。また、外国にルーツを持つ児童・生徒については、あらかじめ派遣会社がどれくらいのお金が必要か丁寧に説明している。
- 外国にルーツを持つ子供に係る幼保小の連携について伺いたい。
■幼稚園・保育所の先生から「小学校に上がるときに日本語初期集中指導教室に入れてもらえないか」という話があるが、相

	<p>当な人数がいるので難しいところがあり、今後の大きな課題と考えている。</p>
<p>委員の主な所感</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○小学校を視察して、やはり電子部品メーカーとそれ以上の派遣紹介企業との拠出ありきで実現した外国人労働者の受入体制とこれによる定着率なのだと悟った。 ○日本国籍を取得する、また、自治会で活躍するなど、地域に馴染み、尽くす姿勢の海外出身者を出雲市のように育成できるなら、子供も自ずと町に馴染み、日本社会に適合して将来へ進めるのだろう。一方、本市ではこのようなスタイルを今から築くことは現実的ではないが、成功例の一つとして政令市以外の市においてなら（千葉県内でも人口減少が進む一方で企業誘致の余地がある市）、市や町ごと企業城下町として治安を保ちつつ、次世代育成に成功させる余地があろう。 ○来日直後の児童生徒を対象にした「日本語初期集中指導教室」を出雲科学館内に設置し、学校受入前に20日間の特別授業を実施。必要最低限の日本語やひらがなの読み書き、ルール・マナー等を指導している。子ども・保護者・学校の負担軽減につながる取組であり、千葉市でも設置予定の動きがあると聞いているが、語学と共にルールやマナー等、文化・習慣の違いについて学ぶことは非常に重要であり、進めていくべきと思った。 ○千葉市においては、日本語指導拠点校の実施までは多くの課題があるが、村田製作所に勤める外国人が多いことから、行政側の出雲市と民間企業が連携し、情報の共有と共に、企業からの財政支援が図られている点は、非常に重要な取組であり千葉市でも参考にしたいと思う。 ○マンツーマンに近い少人数での授業を実施していたが、千葉市においては、どうしても数十人単位での授業になる点が課題だと感じた。 ○村田製作所など、外国人労働者の流入元となる企業や派遣会社と連携し、入学前のプレクラスを設置している点は先進的な取組である。本市においても、プレクラス導入の動きがあるが、外国人が流入する原因の明確化に取り組み、その上で民間企業との連携についても検討する必要がある。 ○限られた日本語指導のリソースを効率的かつ有効に活用できる拠点校制度は、本市においても研究を深めるべき重要な制度であると考ええる。 ○千葉市もURと協議し、財政的支援プログラムの制度設計にURが積極的に参加すべきであると感じた。 ○教員の確保・予算が大きな課題だと思う。 ○小学校と中学校が連携していることと、卒業後のキャリア教育まで見通した指導につなげていることに驚いた。 ○0～5歳の外国籍の子供たちの増加に対応する必要性があり、幼保小の対策が課題であると感じた。

視察時の様子



3 西尾市

(1) 外国にルーツを持つ子供の就学支援事業について

<p>調査目的</p>	<p>西尾市では、外国にルーツを持つ子供への就学支援として、平成20年度からプレスクールを、平成21年度からは不就学・不就園児への支援を実施してきた。令和2年度からは両事業を統合し、就学前児童から高校生（5～18歳）を対象に、言語指導や学習支援などを「多文化ルームKIBOU」で社会福祉法人に委託して実施している。また、日本語及び日本の学校生活に早く慣れるための初期指導が必要な児童生徒に対するプレクラスとして、日本語初期指導教室「カラフル」を鶴城小学校内に設置している。</p> <p>「多文化ルームKIBOU」では「不就園クラス・不就学クラス」「過年齢(16～18歳)クラス」「小学生・中学生クラス」「子供の母語教室(ポルトガル語・中国語・ベトナム語)」「プレスクール」「多言語サポート(ポルトガル語・タガログ語・中国語・ベトナム語)」などの教室を開催し、幅広く就学・進学・学習支援を行っている。</p> <p>「多文化ルームKIBOU」を中心に、西尾市における外国にルーツを持つ子供の就学支援事業に関する事業概要や課題を確認し、本市の取組の参考とする。</p>
<p>視察概要</p>	<p>1 調査項目</p> <p>(1) 外国にルーツを持つ子供の就学支援事業について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 就学支援事業の事業概要、予算 ・ 事業実施に至った経緯 ・ 多文化ルームKIBOUについて <ul style="list-style-type: none"> ア 取組内容 イ 各クラスの特徴、利用料金 ウ 最も需要の多いクラス エ これまでの利用実績 オ 児童生徒、保護者からの声 ・ 事業の効果、課題 ・ 今後の方向性 <div data-bbox="555 1377 1300 1848" data-label="Image"> </div> <p>2 説明者</p> <p>西尾市教育委員会学校教育課 主幹 西尾市教育委員会学校教育課 指導主事 多文化ルームKIBOU 多文化共生教育コーディネーター</p>

	<p>3 主な質疑（□：質疑、■：答弁）</p> <p>□K I B O Uのスタッフは何人いるのか。 ■全員で 10 人おり、そのうち2人は週1、2回、通訳だけの手伝いであり、1人は産休中のため、実質7人で運営している。</p> <p>□K I B O Uの教室はどのような教室か。 ■10m×10mの空間で、ホワイトボードやパーテーションを使って、年代や目的別など、時と場合に応じて空間を分けながら利用している。</p> <p>□ポルトガルやアジア圏の児童生徒が増えたという話があったが、その原因はどのように分析しているか。 ■推測ではあるが、コミュニティ内での口コミなどにより、企業で勤める方が増えたことが要因の一つではないかと思う。</p> <p>□K I B O Uにおける学校との連携について伺いたい。 ■家庭訪問のほか、年に何回か開催される学校の先生の会議に参加して、学校の先生と直接話をしている。また、学校教育課で実施している日本語教育の研修に参加したり、就学前のプレスクールの様子を学校の先生に見てもらって「見学月間」を設けたりしている。</p> <p>□K I B O Uにおける発達障害のある子供への対応について伺いたい。 ■スタッフの専門領域ではないため、気づいたりわかったことがあればスーパーバイザーの先生方につないだり、教育委員会や学校の先生につないだりすることにとどまっている。</p> <p>□K I B O Uのスタッフの人材育成について伺いたい。 ■学校教育課で実施している研修への参加や、通訳ができるスタッフによる自主開催の研修によって人材育成を行っている。</p> <p>□保護者の意見が反映されているということだが、K I B O Uには保護者会のようなものがあるのか。 ■K I B O Uでは保護者会は開催していないが、週末に実施している母語クラスに保護者が集まることが多く、その場で保護者と話している。</p> <p>□K I B O Uを卒業した子供たちのその後について伺いたい。 ■卒業してK I B O Uスタッフになった方もいれば、卒業はしたものの、子供が生まれたときになかなか頼るところがなく、もう一度K I B O Uに来たという方もいる。</p>
委員の主な所感	<p>○入国直後は特段配慮が必要だが、これをまず「カラフル」が担い、その後は「K I B O U」が見守り牽引していくありようは、システムとしてまさしく機能成功事例であると感じた。</p> <p>○今回視察した先の取組のうち、本市が速やかに始められる手本として最も適した市だと思われる。</p> <p>○居住する外国人の多くが日系人であり、千葉市の外国人とは実情が違うが、各人に合わせた対応やクラスの設定や取組は、今後の千葉</p>

	<p>市における外国人の子供の就学支援事業の参考にしたいと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○20 年以上前からの苦労と工夫・試行錯誤の日々が積み重なっての事業であることが伝わってきた。 ○日系ブラジル人の方々への対応が、その後の他の外国人児童への対応にも役立っていると思った。 ○多文化ルームK I B O Uにおける学齢別の対応は重要な先行事例であると思う。 ○2世、3世の方々で運営や指導側になっていただいていることは素晴らしいと思った。上手くいかない場合もあると伺ったが、日本にも母国にも居場所がない状態になり苦しい思いをする可能性もあると思う。ヨーロッパの事例も見て、そのような方々への孤立化防止などの対応も重要になると思う。 ○5歳から18歳の子どもたちの学びの保証や不就学調査、不就学だった学齢の過ぎた若者(16歳~18歳の間)の支援など、千葉市では行っていない支援が多く参考としたい。 ○日本語指導や学習支援を行う多文化ルームについて、社会福祉法人へ委託している事例は、手法として参考になった。 ○クラスがいくつもあり手厚い体制で、多様なニーズに対応していると感じた。 ○公・民の連携が課題であると感じた。 ○不就学クラス、不就園5歳児クラス、不登校対応過年度クラス等、小中学校以外にもきめ細かな対応をしていることに好感が持てる。 ○年齢に合わせて学習の内容も用意していたり、日本語だけでなく、母語、継承クラスなどもあり、一人一人に寄り添い、必要な学びの支援場所となっていることがわかった。 ○学校の施設内には、カラフル(日本語初期指導教室)が設けられ、親の就労等で来日した子どもたちに、原則3ヶ月間、日本語や教科、学校生活の基礎的な練習もしているとのことで、連携して取り組まれていた。
--	--

視察時の様子

